うるくの歴史と文化を語る会
会報ガジャンビラ
第19号

発　行：うるくの歴史と文化を語る会
発行人：赤嶺健治　編集人：赤嶺和雄
〒901-0153
那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内
TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486

うるくの歴史と文化を語る会の活動について
―小禄と豊見城、垣花との深い縁―

赤嶺　健治
（うるくの歴史と文化を語る会 代表）

平成14年５月に、小禄間切、旧小禄村の風土と環境および歴史と文化に関心のある50名で発足した本会は、会員の熱意と関係各位のご支援に支えられて、本年創立15年目を迎えています。主な活動としては、年１回の定期総会と記念講演会の開催をはじめ、調査報告や研究成果を掲載した『会報ガジャンビラ』を第18号まで発行配布し、小禄地域を実地調査する「うるくまーい」を10回実施してきました（１回あたり平均24名が参加しました）。

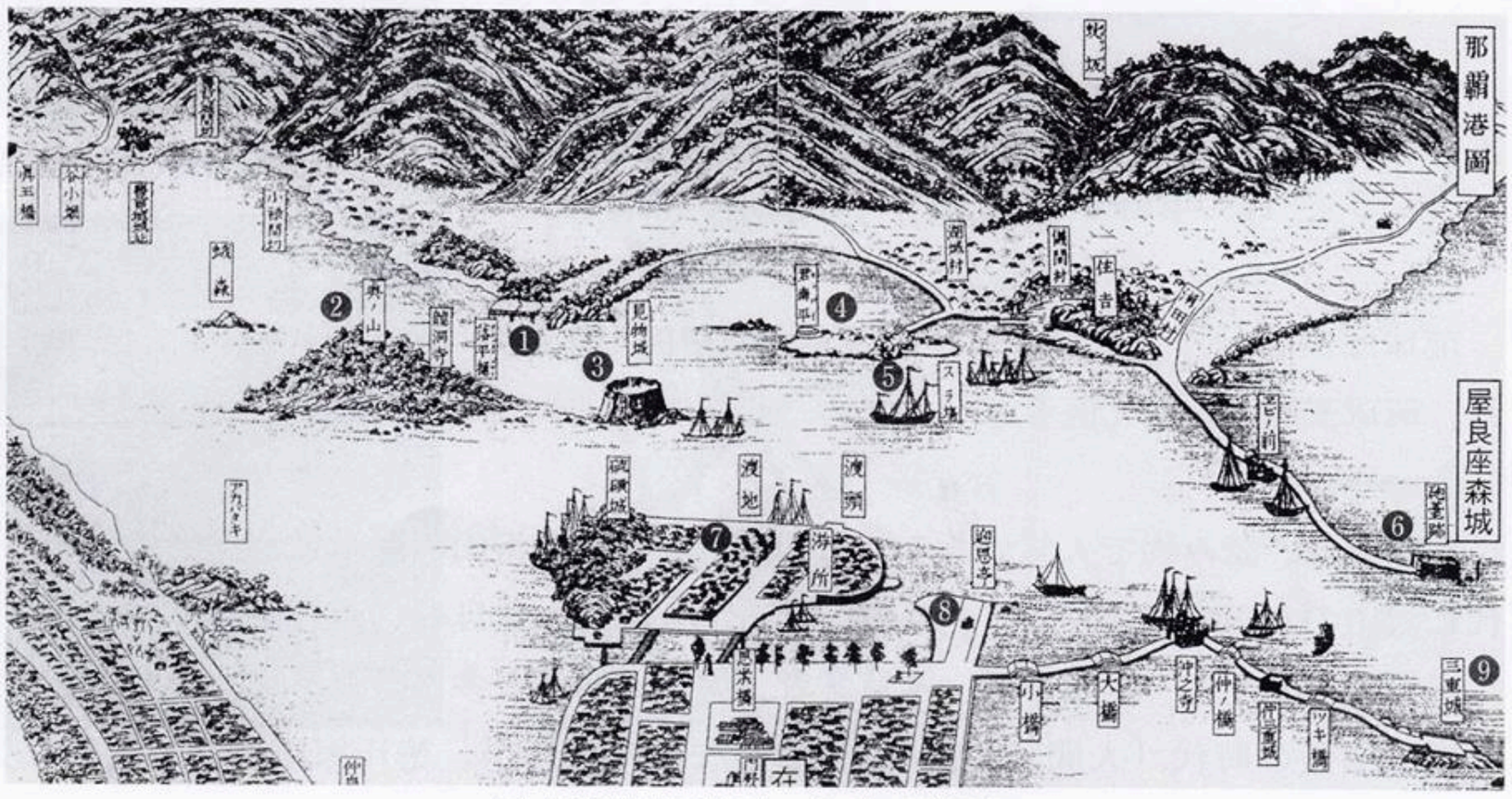
小禄の歴史を概観しますと、1673年に成立した小禄間切には、垣花（儀間と湖城）を含む真和志間切からの３カ村と豊見城間切からの８カ村が編入されました。小禄間切は1908（明治41）年に小禄村になりました。小禄村は1954（昭和29）年に那覇市と合併し現在に至っています。つまり、「うるく」の歴史は、小禄間切時代の235年と小禄村時代の46年を合わせた、小禄としての存立期間の281年に、那覇市と合併以後の62年を加えた、343年に亘る歴史ということになります。

ここで注目したいのは、垣花が、1903（明治36）年に那覇区に編入されるまでの230年間、小禄間切の構成員であったという事実です。要するに、「うるくの歴史と文化」の研究考察は、当然豊見城と垣花を視野に入れる必要がある、ということです。

琉球民謡の「三村節（みむらぶし）」で「小禄（うるく）　豊見城（てぃみぐしく）　垣花（かちぬはな）　三村（みむら）」と歌われるように、この三地域は、元来布織（ぬぬうぃ）り三姉妹と呼べる仲であり、深い絆と縁で繋がっています。垣花については、平成27年11月９日から平成28年２月４日まで36回にわたって『沖縄タイムス』に連載された『海まち垣花　失われた故郷』に、出身者への聞取り調査を含む、かなり詳細で興味深い歴史が記述されていて、大いに参考になります。

また、県立芸大附属研究所共同研究員で本会会員の平良徹也さんが、本会の『会報ガジャンビラ』第13号（平成25年６月発行）に寄せた「真珠道の向こう側へ―小禄の歴史と文化を考えるための那覇江・真珠道文化圏論（仮設）―」でも、この三姉妹の関係が明示されています。その論考で、真珠道（まだまみち）は『首里城を起点に、現在の金城町石畳道、金城橋、識名平坂、識名、真和志番所、上間、国場、真玉橋、真玉橋（字）、嘉数、根差部、石火矢橋、**豊見城グスク、豊見城、小禄、垣花**、那覇港南岸に至る長さ約10Ｋｍに及ぶ石畳道であった』と記述されています。

本会では、3月13日（日）に「第11回うるくまーい」として、真珠道ゆかりの豊見城、小禄、垣花方面を実地調査いたします。本会では、「うるく」に関心をお持ちの方々の、「うるくまーい」やその他の諸活動へのご参加を歓迎いたします。



日本近世生活絵引　奄美・沖縄編

当会顧問　新垣　敏雄

うるくの医療―よもやま話

本稿は、2015年７月２日「うるくの歴史と文化を語る会」の第13回定期総会での記念講演「うるくの医療―よもやま話」で述べたことを基に、呈示できなかった史料を補足し、加筆したものである。

小禄間切の設立は、1673(尚貞５)とされている。

字鏡水は、1903(明治36)にできた一番新しい村であった。その間に史料で確認できる医者の名前は山城正心のみである。

1879(明治12)廃藩置県の以前に、内務省布告により、漢方医56人に西洋医師免許証が授与されたが、殆どが那覇近郊で開業しており、地方にいる医者は非常に少なかった。勿論小禄間切にもいなかった。

史料上で見る第２次世界大戦以前までに小禄地域で医業を行った医師

☆山城　正心	明治29年(1896)雇医となり、明治34年(1901)開業す。
☆福永　兼保	明治34年(1901)間切医として開業
☆許田　重睦	明治40年(1907)間切医として開業
☆高良　慎正	大正４年(1915)開業
☆波平　謙一	大正14年(1925)開業
☆上原　健栄	昭和時代　開業　年代不詳
☆大城　功	大城病院、付属産婆養成所(1937～1944．３) 第２次世界大戦時戦死

琉球史の上で見てみると

1372年	中国皇帝の使者　来琉
1392年	琉球の使者中国訪問、朝貢関係はじまる。 中国の36姓、久米村に移住したとされている。 当時、医者・薬剤師いない。勿論小禄にもいない。
1429年	三山で戦っていた琉球諸島が統一され琉球王国成立。
1470年	第二尚氏王統になる。
1534年	冊封使の陳侃は琉球に医・薬はないが、民は若死することはないと記録している。(表２)

史籍で確認できる医者の存在は山崎守三からである。

1589年	越前国(福井県)から琉球に帰化。

琉球は中国との交流が長いので、漢方の名医が多いはずと学ぶつもりで琉球に来たが、彼が実力者と認められ、琉球王府のお抱え医者となった。

中国では、読み物で人気のある「三国志」の頃から沢山の医学書が出来ており(表３・図１)、日本では江戸時代に沢山の本が中国より入り、漢方が盛になり、日本独自の「漢方医学」として発展を遂げた。

漢学者、国学者、陽明学者、本草学者、儒者、僧侶と多くの人が医学に関係を持った。

織田信長の時代「人間50...」と口づさまれていたが、徳川家康は健康管理に強い関心を持ち「和剤局方」

（1151、北宗）という医学書を参考に自ら薬研をすって薬を調合して飲んだと云われている。75歳まで生きた。

江戸幕府が出来て後、野国総官甘藷を持ち帰り（表２）、薩摩侵襲後、守三の三男守庸が京都へ医学留学し、その後留学生派遣制度ができて玻名城政由が北京留学、高嶺徳明が福州で習った兎唇手術に成功し、大嶺親方が「土帝君」を歓請し、識名盛命（唐名、毛起龍）が「混効験集」を編集し、玉城朝薫が踊り奉公となり組踊を作って芸能を発展させた。1634年より江戸上りがはじまり、18回つづいたが、琉球に医学書が持ち込まれた形跡がなく、医業の進展に努力した業績はみられない。

江戸時代に琉球にあった医書として、史料で見られるのは４冊である（表２）。琉球藩の頃、内務省から赴任してきた役人河原田盛美は「琉球紀行」に「琉球の人ハ書籍保存ノ心ナシ」と記録している。

沖縄では病気のことをフーチ（風気）とかヤンメー（病）と呼ぶ。

フーチでもヤナカゼ（悪風）という呼び方もあり、伝染性の強い症状にいっているものである。

病になったら、身近にある草根木皮、虫、魚、肉を利用したり、原因が霊的なもの、魂の不調和に関係している場合は祈禱師や霊媒者（ユタ）、霊能者に頼り、祈り、占い、託宣呪文を唱えてもらうこともある。

流行病の時は村落の入口に祈禱品を供え付けることがある。邪気祓いの呪術的要素で一種の精神療法である。

これらに対し、マブヤーグミ、マブイ貰い、フーチガエシ（風気返し）と云った呼び方がある。

医師・薬剤師もいない、医療施設もない所で家庭での健康を管理・維持し、自分の身体は自分で守るために考えた知恵・対策が次のような言葉を生み、身近にある素材を生かし、栄養バランスのとれた食生活が日常生活で行われてきた。

☆クスイムン（薬になるもの）　☆シンジグスイ（煎じくすり）　☆ウヂネー（ニー）グスイ（補いぐすり）と云ったものが代替医療の役をした。

その他　☆ハッサンクスイ（発散）、☆サゲクスイ（降下）、☆チーシマシクスイ（血の流れを良くする）等。

☆ハッサン…ヤギ、トリ、アヒル、エイ、タコ、シロイカ　☆チーシマシ…エラブウナギ、馬肉、犬肉

☆サギ（サゲ）…エビ、針千本（アバサー）、シロイカ　☆ヒージャーグスイ…山羊汁は体力回復に重要がられた。マラリヤ、フィラリアの治療にも使われた。

よく使われたのが、

☆ンジャナ（苦菜）（ホウバワダン）・・・胃腸が悪いとき　本土ではゲンノショウコ、センブリ（リンドウ科）、黄連

☆イーチョーバー（茴香）（セリ科）・・・健胃、整腸　☆フーチバー（よもぎ、艾葉）（キク科）、５月５日子供の節句にヨモギ餅（沖縄ではヤギ汁にフーチバージューシー）、昔の米はボロボロだったので、ヨモギを入れてつつき餅にしたもので餅草ともいう。☆ナチョーラ（海人草、海忍草、鷓鴣菜、サントニン）・・・回虫、虫下し

その他、ウケーメー（おかゆ）、カチュー湯（鰹）、ウメボシ（梅）等。

身近にあった素材を列挙してみると（表１）の如くである。

農作業という運動と、魚・肉・海草・緑黄色野菜・豆・乳製品でのバランスのとれた食生活、日光に満たされて、先人達の知恵と工夫で健康と長寿を保ち、一時期長寿世界一宣言もしたが、「衣食足りて栄辱を知る」が「物盛んなれば即ち衰う」になってしまい、肥満県全国一となり、働き盛りの人が仕事に対する知恵・エネルギー・情熱よりも、行楽、娯楽へと目が向き、20～30代の飲酒量が突出しており、飲みすぎて思い出せない経験があるのも男・女とも全国平均の倍以上となっており、テレビでは「沖縄県は飲み過ぎの県なんだ」と子供達に云わせる状態である。

長寿日本一をころげ落ちた今、改めて飲食の生活を見直し、自分と家族の健康・長寿を維持できるよう努力する必要がある。

３人に１人がガンになる時代、先人たちの知恵や教えを（表４～８）から選んで健康を維持してほしい。

表 1

ゴーヤー（苦瓜）蔓荔枝
ナーベーラー（ヘチマ、糸瓜）
シブイ（冬瓜）
チンクワー（カボチャ、南瓜）
デークニ（大根）
タマナー（キャベツ）
パパヤ
キュウリ（黄瓜）
ニンジン
米
大豆
甘藷
グンボ（ゴボウ）
マーミナー（もやし）
コンニャク

豚肉
牛肉
ウナギ
イラブー
エビ
メバル
クーイユ（真鯉）
ターイユ（フナ）
ハマグリ
クーブ（昆布）
ワカメ
モズク
塩
グルクン（タカサゴ）（県魚）

ニンニク（大蒜）オオヒル、葫
ヒル（ノビル、蒜）
チリビラ（ニラ、韮子）
ラッキョ、薤白、オオニラ
コーレーグースー（トウガラシ）
タマネギ
ネギ
ヒハツ（ヒハツモドキ）畢撥、蒟醤

外用薬（打ち身、やけど、外傷に）ルガイ（アロエ）、ウコン、チガヤ、ドクダミ（十薬、重薬、魚腥草、蕺菜）ガマ（蒲黄）（大国主の命、因幡の白兔の神話）、万金丹、ガマの油、メンソレータム

表 2

医療史や歴史の流れ（琉球）

1534 年　「使琉球録」陳侃（冊封使）「医薬はないが、夭折せず」（民は若死することはない）
1589 年　（天正 17 年）山崎守三　越前から帰化
1603 年　江戸幕府（家康武家政権）
1605 年　野国総官芋を持ち帰る
1609 年　薩摩侵攻
1630 年　守三息子（三男）守庸　京都へ留学。3 年間寿徳院玄由に師事した。
1634 年　（寛永 11）江戸上い始まり 1851（嘉永 3）まで 18 回つづいた。
1637 年　留学生派遣制度
1638 年　玻名城政由　北京へ留学。留学は薩摩か北京と福州に限られていた。
1678 年　鄭　弘良（大嶺親方）明倫堂以前の訓詁師
1689 年　高嶺徳明王子尚益の手術を成功する。
1698 年　大嶺親方「土帝君」を歓請　大嶺に石祠を作る。
1711 年　「混効験集」識名盛命（唐名　毛起龍）
1715 年　玉城朝薫　踊り奉公となる。
1718 年　玉城朝薫　組踊をつくる
1721 年　幕府　小石川に薬園を設ける。
1846 年　ベッテルハイム来琉
1868 年　（明治元年）牛痘法採用する。
1879 年　（明治 12 年）「沖縄県」となる。
1885 年　（明治 18 年）「医生講習所」を創設

史料で見る江戸時代に琉球にあった医書

1729 年　「普救類方」丹羽正伯
1771 年　「琉球物産志」
1782 年　「質問本草」
1832 年　「御膳本草」

表 3

後漢　張仲景「神農本草経」「金匱要略」「傷寒論」2～3 世紀
隋 610 年　巣　元方　「諸病源候論」
唐 655 年　孫　思邈　「千金方」
唐 753 年　王　燾　「外台秘要方」
唐 754 年　鑑　真　来朝
984 年　丹波康頼　「医心方」
1118 年　聖済総録（紅散子方）
1146 年　扁鵲心書（唾聖散）
1151 年　「和剤局方」（家康）
1220 年　儒門事親　　張　従正
1293 年　発巳新刊・御薬院方
1337 年　世医得効方（草鳥散）
1545 年　曲直瀬道三　京都へ
1547 年　吉田宋桂　「聖済総録」など多くの遺書を中国より持ち帰る。
1556 年　徐　春甫　「古今医統大全」
1587 年　龔　廷賢　廷賢　「万病回春」
1596 年　本草網目　　李 時珍　　許凌（宜租 30）「東医宝鑑」
1598 年　李　時珍　「本草網目」（日本へ）
1599 年　逍　開美　「仲景全書」
1603 年　江戸幕府　（家康武家政権）
1602～1608 年　瘍科証治準繩
1709 年　貝原益軒　「大和本草」
1721 年　幕府小石川に薬園を設ける。
1722 年　室　鳩巣　荻生徂徠
1734 年　青木 昆陽
1742 年　（乾隆 7）「医宗金鑑」　呉 謙
1777 年　（安永 6 年）「楊氏家蔵方」宗・楊淡
1796 年　「麻薬考」華岡青洲・中川修亭
1849 年　青洲口授「外科摘要」

表3・図1

筆者所蔵している漢方医学書

表4

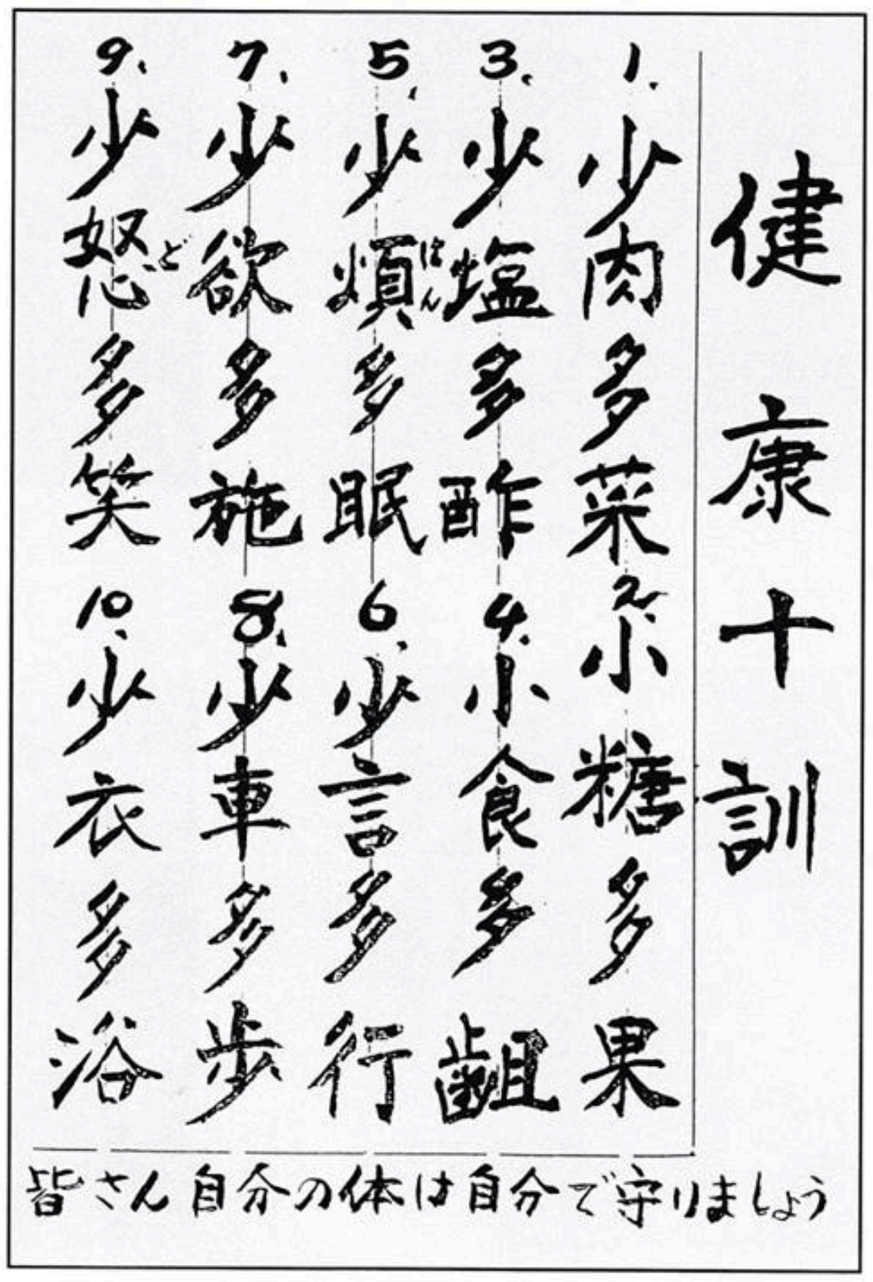


表5

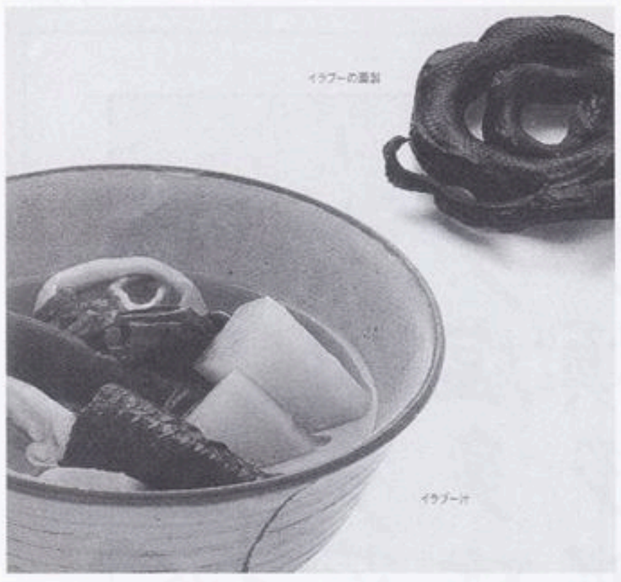
安岡正篤語録

健康の秘訣〝十五の自省〟

環境と身体、精神と身体、日々の生活と身体の微妙な関連は、それがきちんと調和していれば、病気知らずの健康秘訣になる。

安岡先生は、その調和のコツとでもいうべきものを〝十五の自省〟としてまとめておられた。すなわち、

①飲食は適正か
②毎晩、安眠・熟睡できるか
③心身に影響を及ぼす悪習慣はないか
④適当な運動をしているか
⑤日常、一喜一憂しやすくないか
⑥精神的動揺があっても、仕事を平常通り続けられるか
⑦毎日の仕事に自分を打ち込んでいるか
⑧自分は今の仕事に適しているか
⑨現在の仕事を自分の生涯の仕事となし得ているか
⑩自分の仕事と生活に退屈していないか
⑪絶えず追求すべき明確な課題を持っているか
⑫人に対して誠実であるか
⑬人間をつくるのに学問修養に努めているか
⑭エキスパートになるための知識技術を修めているか
⑮信仰・信念・哲学を持っているか



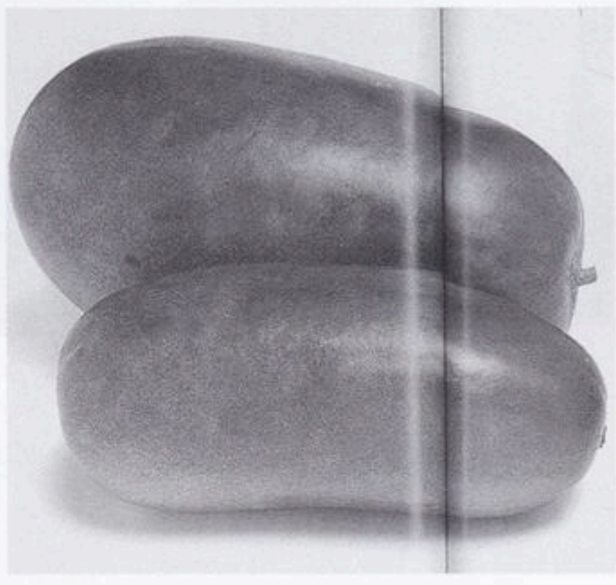
イラブー汁・イラブー燻製

ヒージャー汁

豚肉

フーチバー（ヨモギ）

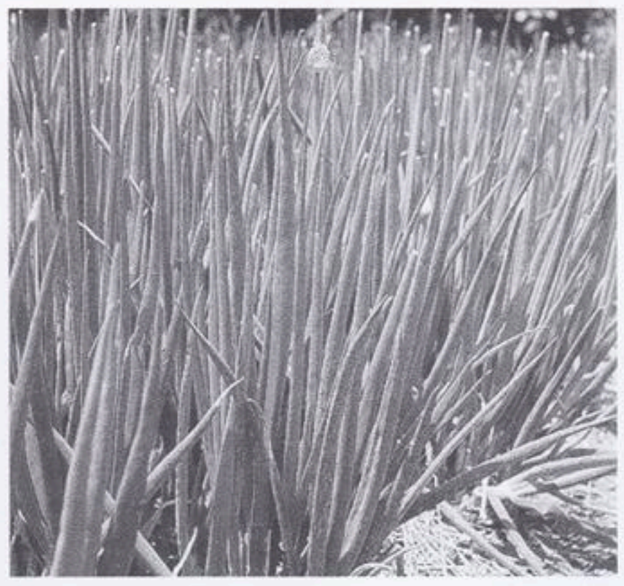
ナチョーラ（マクリ）



シブイ（トウガ・冬瓜）

イチョーバー（ウイキョウ）

ドクダミ

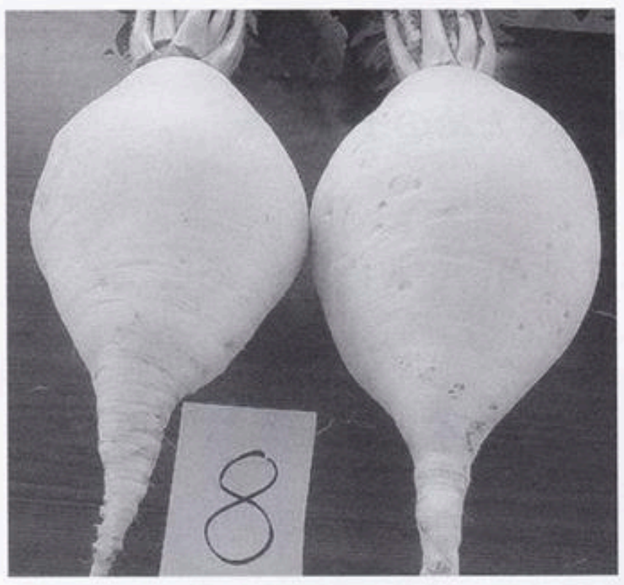


ビラ（ネギ）

グンボー（ゴボウ）

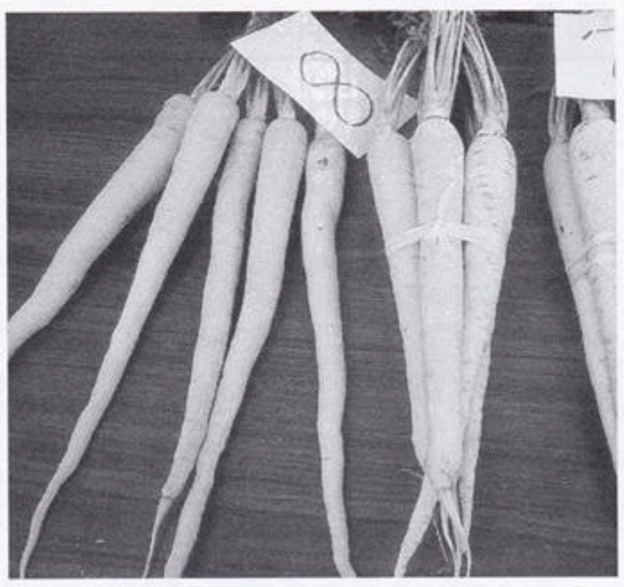
ラッチョウ（シマラッキョウ）

ルグヮイ（アロエ）



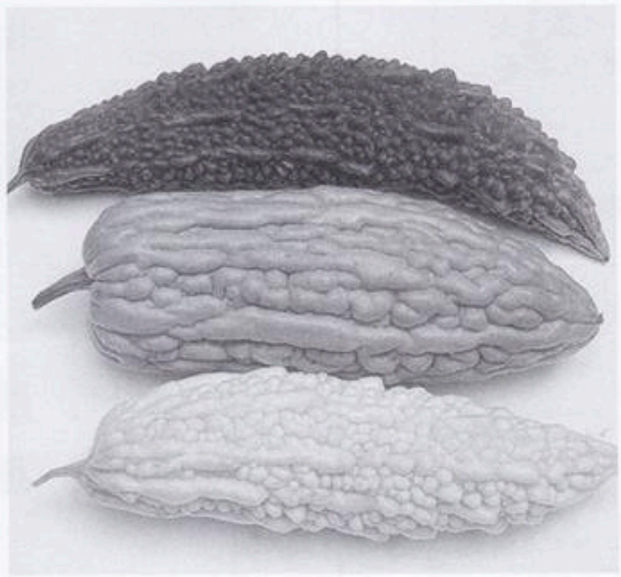
カカンジテークニ（ダイコン）

ウム（イモ・甘藷）

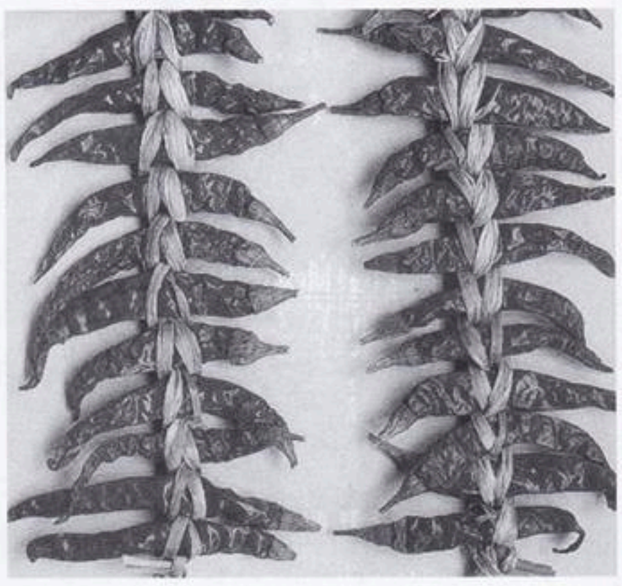


チデークニ（シマニンジン）

パパヤ（パパヤー・マンジュイ）



ゴーヤー（ニガウリ）



コーレーグス（トウガラシ）

ンジャナ（ホソバワダン）

フィファチ（ヒハツモドキ）

ウッチン（ウコン）

長命草（サクナ）

ナーベーラー（ヘチマ）

クヮンソウ（アキノワスレグサ）

写真：赤嶺和雄、沖縄教材植物図鑑（多和田真淳　監修）、健康と薬草（吉川敏男　著）、
沖縄の海藻と海草（当真武　著）、沖縄野菜の本（西大八重子　著）

表6

「長生きの条件 12か条」

第1条　血液のアルブミン（蛋白質）が多い。
　　・・・脳細胞・筋肉・骨の成分として重要！
第2条　血色素が多い。
　　・・・酸素を運ぶ鉄が含まれる
第3条　太り方は中ぐらい。
　　・・・或る程度の予備力は必要
第4条　握力が強い。
　　・・・握力は全筋力・体力の表徴
第5条　短期の記憶力がよい。
　　・・・RIBOTの法則
第6条　スポーツの習慣がある。
　　・・・廃用性萎縮と脱灰現象
第7条　タバコを吸わない。
　　・・・慢性気管支炎・肺気腫・肺ガン・狭心症
第8条　お酒を少し飲む。
　　・・・薫糖酒
第9条　社会活動性が高い。
　　・・・出番・役割と脳細胞の廃用性萎縮
第10条　牛乳を飲む。
　　・・・骨粗鬆症と脱灰現象
第11条　油脂の料理をよくとる。
　　・・・植物性油脂とビタミン摂取
第12条　善意に解釈する。
　　・・・気から病へ

「ブレスローの7つの健康週間」

①喫煙しない
②定期的に運動する
③飲酒は適量を守るか、しない
④1日7～8時間の睡眠をとる
⑤適正体重を維持する
⑥朝食を食べる
⑦間食をしない

表7

ガンを防ぐための十二カ条

1．バランスのとれた栄養をとる
2．毎日、変化のある食生活を
3．食べ過ぎをさけ、脂肪をひかえめに
4．お酒はほどほどに
5．タバコは少なくする
6．食べ物から適量のビタミンと繊維質のものを多くとる
7．塩辛いものは少なめに、熱いものはさましてから
8．焦げた部分はさける
9．カビの生えたものに注意
10．日光に当たりすぎない
11．適度にスポーツをする
12．身体を清潔に

（財団法人がん研究振興財団）

表8

健康管理のために、日常の食生活にくれぐれもご留意ください。

○おすすめする食品

主食	未精白	穀類	米（玄米、胚芽精米）あわ、ひえ きび、小麦、とうもろこし、そば
		パン類	玄米パン、胚芽パン、ライ麦パン
	芋類		自然薯、さつまいも、里いも
野菜類（路地もの）		有色野菜	小松菜、にら、春菊、かぼちゃ、ピーマン
		淡色野菜	キャベツ、白菜、もやし、長ねぎ、たまねぎ
		根菜	人参、大根、蓮根、ごぼう
		山菜、きのこ類、つけ物	
豆類		大豆、（枝豆）、えんどう、いんげん あずき、ゴマ	
		大豆製品	豆腐類、がんもどき、納豆 みそ汁、ゆば
魚介類		小魚、川魚、白身・赤身の魚、えび かき、あさり、シジミ貝	
海藻類		海苔、こんぶ、ひじき、わかめ	
調味料		大豆オリゴ糖、自然塩 みそ、醤油、ゴマ油	
茶		緑茶、ほうじ茶、野草茶	

【日常の心得】
①食事の量は、腹七、八分目。心がけましょう。
②加工食品は控え目にしましょう。
③間食は控え目にしましょう。
④時間をかけて、ゆっくり噛んで食べましょう。
⑤冷たい飲食物はさけ、温かいものを食べましょう。
⑥毎日の排便を心がけて下さい。

2015年7月2日　第13回定期総会　記念講演

赤嶺勢理客のティージュクンガー

幹事 長嶺 弘善
(大学非常勤講師)

「勢理客大親のお骨は、牛や馬の骨かと思われるほど大きかった」

赤嶺勢理客〔あかんみ じっちゃく〕大親〔うふうや〕は、16世紀末赤嶺村仲本門中の中興の祖(筆者の14代前)である。仲本大主〔なかむとぅ うふしゅ〕とも呼ぶ。冒頭の話は、戦時中の逸話である。1944年10月10日那覇大空襲前の夏頃、大親御墓を高射砲陣地として使用するので、遺骨を移すようにという日本軍の指示があった。御墓は字鏡水崎原にあった。小さな岩山を利用した横穴式風葬墓だったようである(新垣武三氏・字鏡水1931年生談)。壮年者は戦地に赴いており、婦人たちがお骨を引き取りに行った。小禄内陸地域にも戦火が迫る中、疎開準備に追われていたので、お骨は厨子甕に納め、赤嶺御嶽(現・赤嶺緑地内)の一角に穴を掘り、仮埋葬した(長嶺喜三氏1932年生談)。戦禍を逃れ、現在は門中墓(アジシー墓)に葬られている。

『仲本の由来』(1954年9月、以下由来記という)によれば、崎原の大親御墓(現・門中共有地、造営年不詳)は、覗くことができ、お骨はびっくりするくらい大きかった。この御墓は、大親に続く剛力の子孫を埋葬予定していた。赤嶺村外れの門中墓は、由来記作成時より「約300年位前」の1650年頃に造営され、最初の被葬者は大親の妻である。筆者は先に、「大東り小」系図を遡ることで、大親は1555年頃生まれと推測し、1600年頃は充実した壮年期であろうと論じた(拙稿『会報ガジャンビラ15号』8頁)。大親が何歳まで存命したか定かでないが、由来記との間に少し年代の開きがある。だが、妻が大親より大分若く長命だったと考えれば、矛盾はないと思う。

ティージュクンガーの位置関係(国土地理院:那覇市鏡水)

大親が剛力・豪腕であったことの伝承が、ティージュクンガー物語に表れている。残念なことに(不思議なことにと言うべきか)、この物語は由来記に記載がない。だが、小禄地域で広く語り継がれてきた。『うるくぬ んかしばなし』(那覇市教委文化課1989年2月8頁)や、『高良の字誌』(高良宝友会2008年11月235頁)に、収録されている。門中で語り伝えられている内容も合わせると、およそ次のような超人伝説である。なお、大親が活躍した1600年前後は、豊見城間切赤嶺村であり、鏡水は安次嶺村の屋取集落であった(『会報ガジャンビラ15号』2頁表中「大嶺屋取」とあるのを訂正する)。

赤嶺勢理客が「カー」を穿つ
(作画:琉大みどり、構成©:ZEN)

赤嶺勢理客大親(仲本大主)は、1600年前後に活躍した赤嶺村の人である。多くの武勇伝があり、また心根が優しく、人々から慕われていた。赤嶺安里原で農業に精を出し、ときには鏡水崎原で漁をした。ある日の干潮時にさしかかる頃、崎原の磯に出て漁をしたところ、しばらくしてのどが渇いた。ここにカー(井)があればと、剛力に任せて磯(浜)に手拳を突いたら、ひび割れて水が湧き、のどを潤すことができた。このカー(井)は大いに利用された。人々は大親の武勇を敬慕し、また水の恵みに感謝するようになった。そして赤嶺勢理客のティージュクンガーと呼び、拝所として守り伝えてきた。

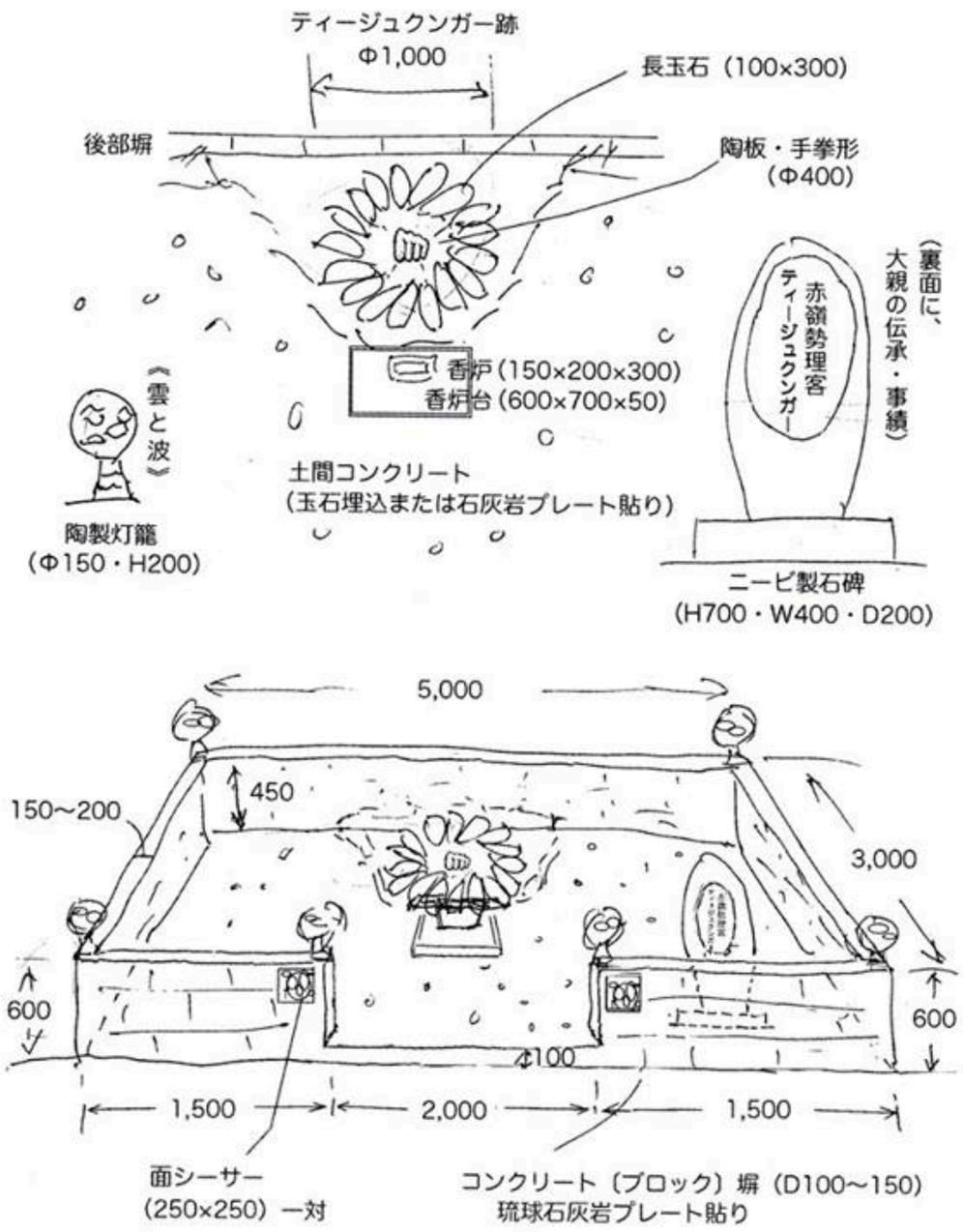
大親は、由来記では首里城内勤めをしており、門中古老からの伝承では、水に関わる仕事もしていた（長嶺政夫1940年生談）。そこで、ここからは筆者の推測・想像である。大親は、那覇港の水先案内のような仕事をしていたと想像する（別稿で記す）。那覇港から崎原にかけての海岸地形や一帯の状況に、精通していたのであろう。そして干潮時の水たまりで波紋のゆらぎを見つけた大親は、砂礫をかき分け、砂粒の静まりを待って、水をすくい飲んだ。大親は驚き叫んだ。「水だ！」。カー（井）を発見したのである。大親の一連の行動を岸近くから見ていた者が、息せき切って鏡水集落へ駆け、人々に伝えた。「赤嶺勢理客〔あかんみ じっちゃく〕や真実〔まくとぅ〕の武士やいびーん〔です〕。ティージュクン（手拳・手拳突き）し、カー掘〔ふ〕いやびたん〔りました〕」と。もちろん大親は正直に否定したであろうが、謙遜と受け止められた。多くの剛力物語がある勇者・大親ならできると、人々は語り合い、敬意を表し、新たなティージュクンガー伝承を物語り出した。そして大親は、海に関わる仕事に誇りを持っており、後に、赤嶺村から離れた崎原の地に、墓を自ら造営（あるいは造営遺言）したのである。

集合拝所とティージュクンガー
(1)ティージュクンガーは左側円内、右下に拡大。
(2)大坂航空局の拝所移転お知らせ（拝所右正面掲示）

このカー（井）は、どこにあったのか。字鏡水の戦前期の少年たちは干潟でよく遊び、のどが渇くとティージュクンガーを利用した（新垣武三氏、新崎利雄氏1934年生、平良幸次郎氏1939年生談）。カーは岸から数10メートル離れ、リーフの中ほどにあった。そこは、満潮時には膝高を超える深さだった。礫岩で丸く囲まれ、直径約30センチメートル、深さ約50センチメートルのカーであった。砂で埋まっていたこともあるが、砂をかき出すと腕の深さほどあったという。真水だったとか塩気を含んでいたとか、水量は少し溜まるほどとか湧き出るほどだったとか、70年前の少年たちの記憶に食い違いがあるのはやむを得ない。崎原台地からの伏流水が崎原干潟で湧水となって干潮時に現れるので、潮水が混じることはあり得る。しかし、雨が続いた後などは伏流水も豊富で、湧き出るほどの真水だったであろう。

『旧小禄の歴史・民俗地図』（那覇市歴史博物館=旧市史編集室1978年12月）は、「ティージクンガー」の位置を示す唯一の地図と思われる。だが、その位置を岸辺（陸側）に記しており、疑問である。基礎資料である前年11月の『那覇市歴史・民俗地図　鏡水』では、岸にはぼ接する海（浜）側に記されていた。これも疑問である。別の湧水があったのかと問うと、三氏（鏡水の「少年たち」）は否定した。

ティージュクンガー移設計画図（原案:ZEN）



崎原近辺には、琉球王府時代から多くの拝所が守り伝えられてきたが、戦後埋立が進められた。1978年2月、那覇空港ターミナル社が空港北東側に集合拝所を建設し、また航空安全祈願祭を行ってきた（沖縄エアポートサービス(株)創立30周年記念誌207頁1995年）。また字鏡水有志がティージュクンガー拝所の施設も整えてくれたことは感謝に堪えない。最近、大坂航空局の空港エプロン整備に伴い、2016年度中のティージュクンガー移設が必要になった。今回の移設については、航空局に協力し、仲本門中が主体的に責任を持って計画している。

―― 2016年2月29日稿

編集委員　高良　広輝

第 10 回うるくま～い

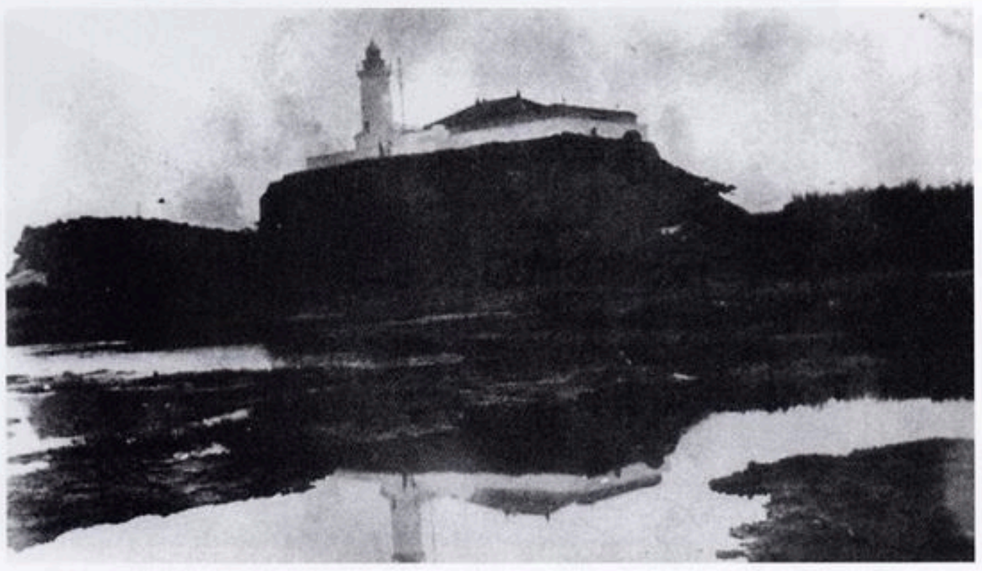
第 10 回「うるくま～い」が平成 27 年 3 月 12 日（木）に行われました。
赤嶺自治会館に集合した 20 名で、マイクロバスにて 14:00 に出発しました。
今回のま～いは、那覇航空交通管制部敷地内にある「先原崎灯台跡（鏡水 334)」と航空自衛隊那覇基地内にある「旧海軍砲台跡地（当間）」及び「桃原泉（具志）」です。
いずれも立入制限があり、事前に許可申請をしました。
場所はインターネットの Google マップにて検索できます。

■先原崎灯台跡（サチバルザチトウダイアト）

旧跡表示板の説明によると、1896 年（明治 29）1 月 10 日起工し 9 月 15 日竣工され沖縄で最初に建てられた灯台跡。

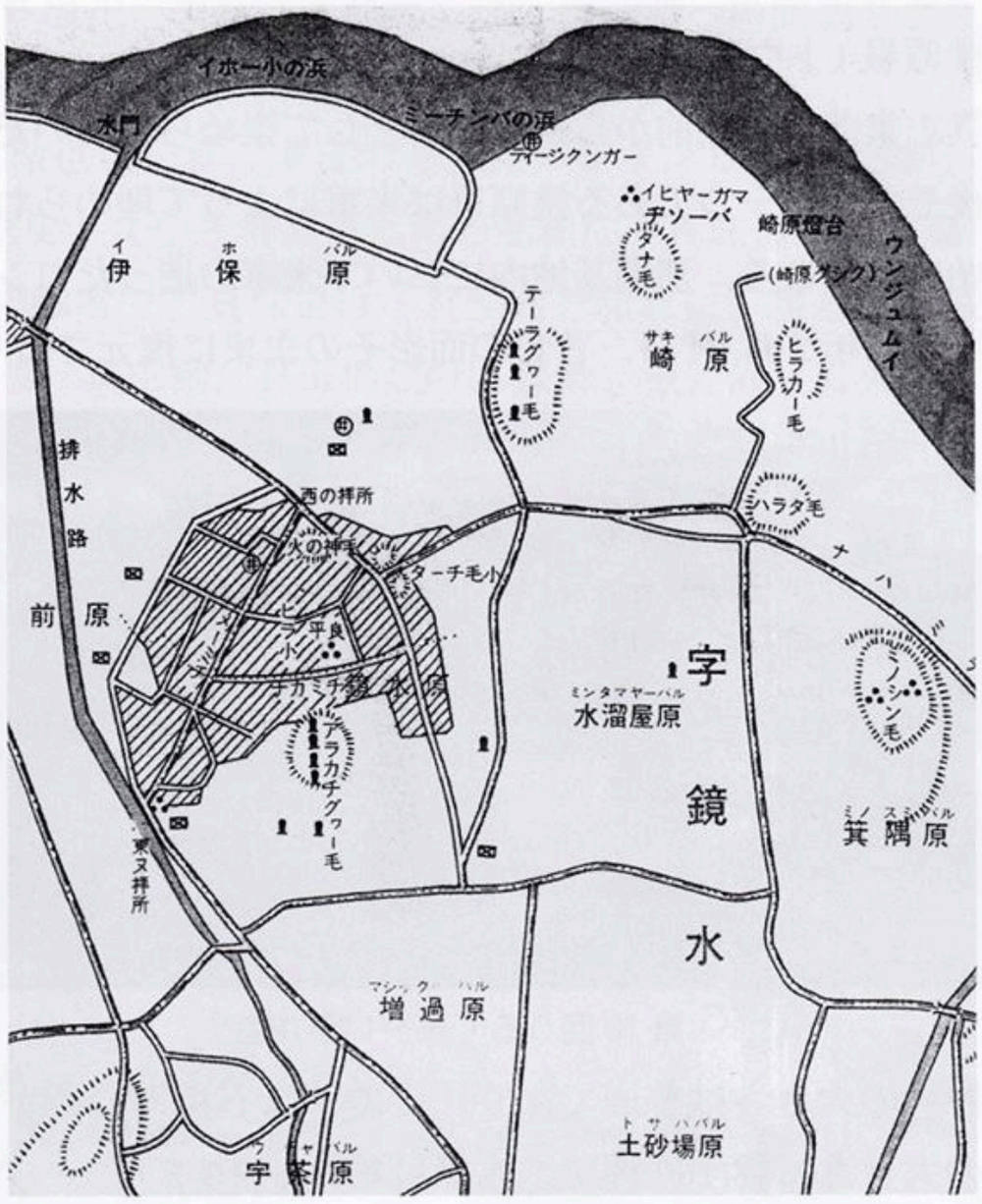
陸軍省臨時台湾燈標建設部により、島尻郡小禄間切安次嶺村の地先、崎原の突端岩礁（通称：崎原グスク）の上に、高さ 12 m のレンガ造りの灯台と官舎及び倉庫が建設され、同年 11 月 25 日に初点灯が行わた以後、赤緑光二色の灯光で付近の干瀬の場所を示し、那覇港に出入りする船舶の航行安全を図った。

1945 年（昭和 20）の沖縄戦で灯台は破壊され、跡地は米軍により航路標識塔が建てられた。



▲戦前の先原崎灯台（東京在の五十嵐熙さん提供）

▲現在残っている航路標識塔と台座跡▼

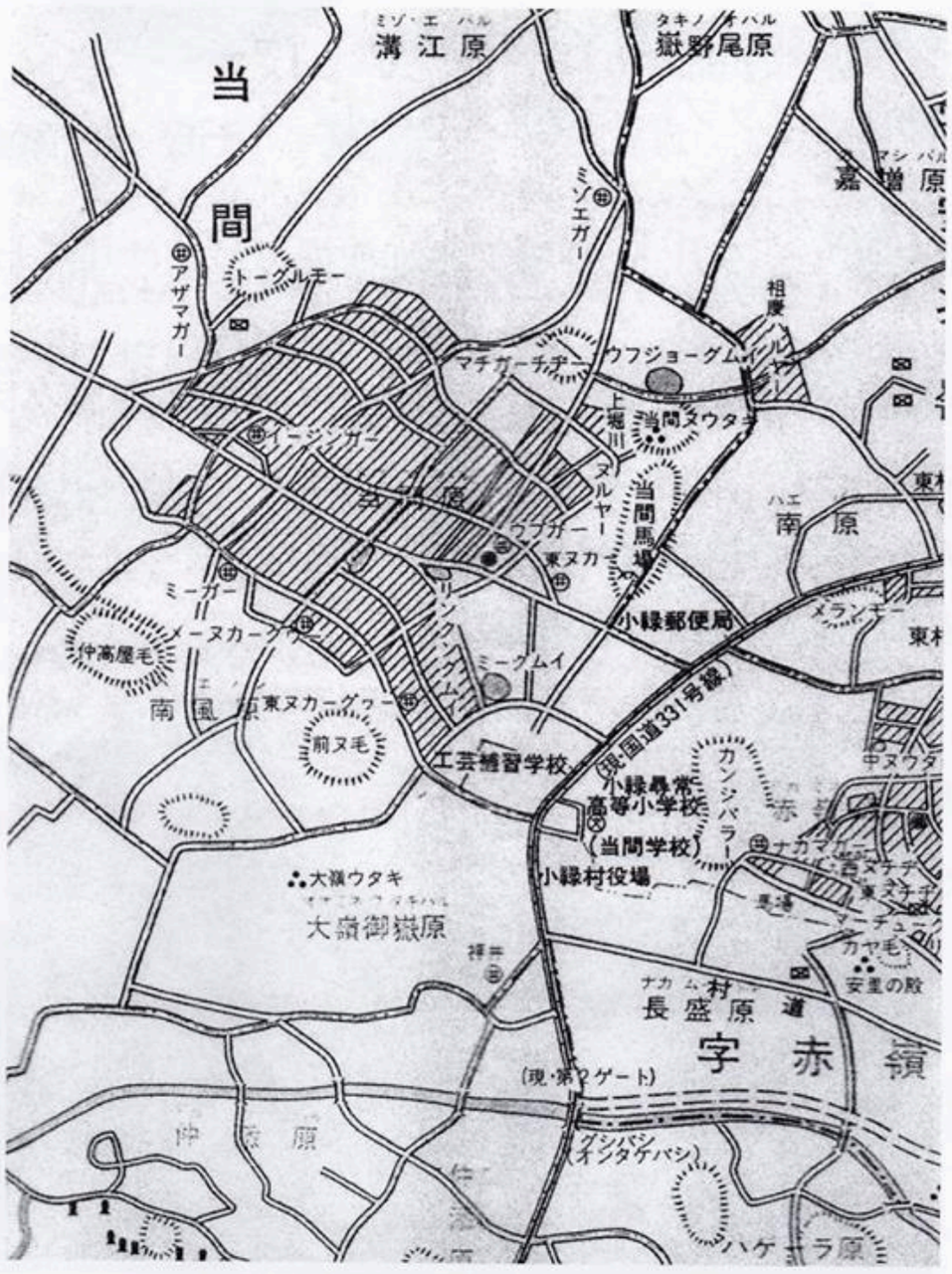


那覇市歴史博物館　市史編集室　1978 年 12 月

■旧海軍砲台跡地（当間砲台）

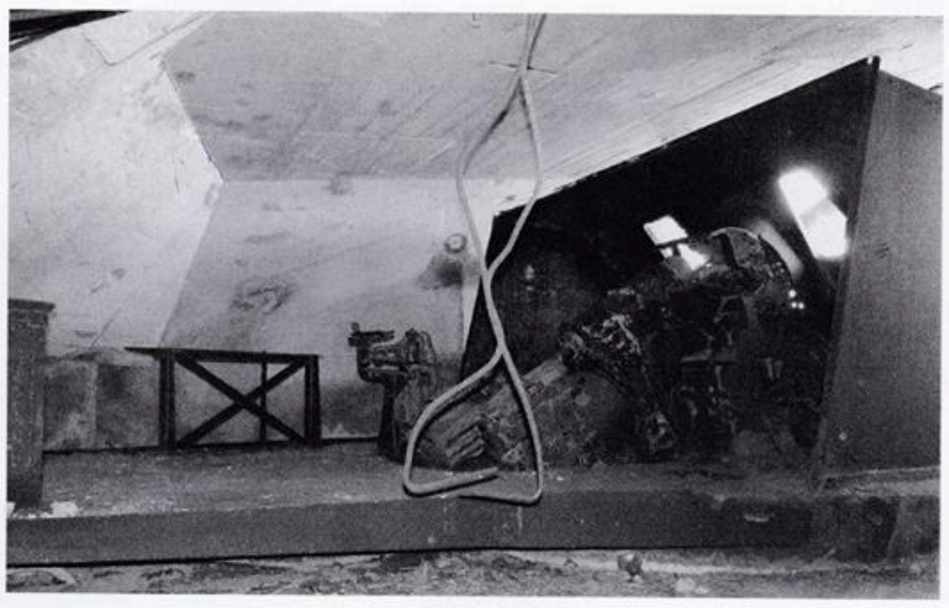
1943（昭和 18）年 6 月から 10 月の間に海軍小禄飛行場が、対潜水艦用基地として整備拡充されるに伴い、（海軍の軍艦から取り外し）海軍施設山根部隊によって施工、整備された 15 糎（センチ）水上砲台 6 基中の 1 基である。1945（昭和 20）年 4 月上旬、米軍沖縄上陸に際し、これらの砲台は、那覇西海上の海域に出現した米海軍軽巡洋艦 1 隻を撃沈したと言われている。米軍の猛烈な砲爆撃（1 発撃つと 1,000 発の反撃）により、この 1 基を除き、他はほとんど原型をとどめぬまでに破壊された。（説明板より引用）

砲台は地図中の「前ヌ毛」に設置されていた。



▲那覇市歴史博物館＝市史編集室

▲外観と内部▼



■桃原泉（トウバルガー）

具志集落には戦前から神聖場所として崇められていたウッカー、ヌールガー、トウバルガーの三湧泉があった。戦後その内の一つである桃原泉は米軍によって埋められ、人々の記憶からも忘れられようとしているとの話から調査を始めたところ、那覇基地内において米軍の造ったコンクリート路面の下から、桃原泉が発掘された。

平成 3 年 2 月 24 日、昔日の面影そのままに復元された。（説明板より引用）

第 10 回うるくま～い参加者

桃原ガー

井戸の大きさは普通であり、その下に石積みの所があり、おもに生活用水として利用されていた。

池の大きさは約 100 坪で、水深は約 1 ～ 1．2 m あった。

当時は近くに製糖工場があり、工場で働いた馬の体を洗ったり、子供たちの水遊び場としても利用していた。

（那覇基地資料より）